

令和 4 年 6 月 16 日現在

機関番号：33902

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2021

課題番号：19K00965

研究課題名(和文) 中世日本における兵法書の伝授と展開―「国家」理念の形成に関わる聖教の発掘と調査―

研究課題名(英文) The initiation and expansion of a book of tactics in Early-Modern period in Japan; Discovering and research on Buddhist Scriptures concerned with new philosophy of the governing country

研究代表者

福島 金治 (FUKUSHIMA, KANEHARU)

愛知学院大学・文学部・教授

研究者番号：70319177

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,200,000円

研究成果の概要(和文)：日本の近世社会は、徳治主義をその基盤の一つにおいていた。こうした考えの成立の背景は、禅僧の学んだ朱子学の世俗への展開などで説明されてきた。これに対し、中世の密教僧や修験者が所持した兵法書には、戦術・戦法のマニュアルとなっていたまじないや占いを基礎とした兵法書とともに、『三略』などの漢籍の註解を密教思想によって解釈した兵法書がある。後者においては、侍を官吏と位置づけ、百姓への撫民が語られ、戦国期の矛盾を脱した安全な新しい国家の創出を語る理念が含まれていた。今回の科研ではこれらを確認し翻刻・紹介した。さらに、密教聖教系の兵法書には暦のマニュアルなどがあり、これを使って地方暦の実態を検討した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

中世の兵法書には、「張良一卷書」『甲陽軍鑑』などの他、修験系の兵法のマニュアル、『三略』『六韜』などの漢籍の兵書を儒者が注釈した書物などがあり、国文学・歴史学・民俗学・書誌学の研究対象とされてきた。一方、密教・修験に関わる聖教類に含まれる兵法書には密教僧の仏教を基礎とした兵法また漢籍注釈の書があり、君主のあり方や「土農工商」などの理念を語るものもある。これらの兵法書は現実批判の書で、あるべき「国家」像を語っていた。そこで、これら未刊行の書物を翻刻・紹介し、中・近世移行期のすがたを具体的に語る素材を提示した。これにより近世の「国家」理念形成の背景を幅広く理解できる環境作りの一助となったと思う。

研究成果の概要(英文)：Early modern Japanese society had a principle of virtuous government as one of its foundations. The background of the formation of these ideas has been explained by the development of learning about Chu Tzu by Zen Monks into the secular society. In contrast, I focused on the books of tactics held by medieval esoteric monks. One is based on magic and divination that served as a manual on tactics. Other is a book that interprets the commentaries of Chinese texts such as the Three Strategies of Huang Shigong (三略). latter included the positioning of the samurai as officials, the benevolence for peasants, and the creation of a new and safe state that broke free from the contradictions of the Sengoku period. In this Grants-in-Aid for Scientific Research, I have confirmed and transcribed and introduced these. On the other hand, there are calendar manuals in the books of martial arts based on the esoteric holy religion, and I used this to examine the actual state of the local calendar.

研究分野：日本中世史

キーワード：兵法書 黄石公三略私抄 地方暦 牛王宝印 修験 密教 漢籍

## 1. 研究開始当初の背景

本研究は中世日本の兵法書について、仏教の聖教類や武家の相伝文書に含まれている兵法書を発掘し、これを日本中世史研究などの素材に追加し、中世後期の社会の基層で共有されていた認識内容を把握しようとしたものである。

刊行された兵法書には、石岡久夫編・有馬成甫監修『日本兵法全書』(新人物往来社、1967～69年)、古川哲史監修魚住孝至・羽賀久人校注『戦国武士の心得 『軍法侍用集』の研究』(ぺりかん社、2001年)、柳生宗矩著・渡辺一郎校注『兵法家伝書 付.新陰流兵法目録事』(岩波文庫、1985年)などがあり、活字版で紹介されてきた。これらは近世社会で基本とされた兵法・兵学書を紹介したものであり、前者は近世の兵法諸流を甲州流などと流派ごとに分類し、後者の『軍法侍用集』もまた近世前期以降に成立し普及した書物だった。その内容は武田氏の兵法などを伝える『甲陽軍鑑』にみられるように、戦国社会の記憶を継承し、また戦術などを整理して伝授したもの、北条流や『軍法侍用集』などは特に小笠原流の兵法書『訓閲集』などを吸収して成立した書物だった。いずれも近世の兵法書を紹介したものであった。その源泉ともいえる『訓閲集』は原形的な伝授モノ(切紙)を統合した兵法書だが、例えば鉄砲といった新兵器が導入されると、その内容を含みこんで改変されていくようであり、できうればその改変・変容の道筋がわかるような書誌的検討とその資料紹介が必要と感じていた。

一方、中世以降に成立した兵法書には、右の兵法書が成立する前提となるような事象が含まれていることにも気がついた。1)南北朝期には成立していた『張良一卷書』は呪術的なまじないが基本にあり、毛利元就らに継受され、戦国大名の家の精神的統合に役立った側面があったことは岸田裕之氏の指摘するところで、2)『甲陽軍鑑』などは戦国大名研究の素材となっており、『甲陽軍鑑』には『三略』『六韜』などの漢籍が引用されること、3)島津家文書の兵法書には修験的要素が濃厚で伝授には修験者でもある家臣が関わり彼らは軍師でもあったこと、などが指摘されていた。これらの事情をうけて、4)国語学では兵法書等に使用される言葉・用語が研究され、5)漢籍研究では『三略』『六韜』などの兵書についての儒者の注釈研究が累積していた。

本科研の申請者福島は、本科研以前に人吉願成寺文書に『仏説弓法陀羅尼經』という密教・修験者による兵法書があり、これを紹介していた(福島金治「中世後期南九州の兵法書の性格とその受容形態」『愛知学院大学文学部紀要』48、2019年)。同書は密教を基礎におく兵法書で、これまで知られていなかった。このような兵法書を発掘し紹介することを行えば、中世から近世初期の兵法書から当時の社会的方向がみえるのではないかと考えた。

また、福島はすでに島津家文書の兵法書には、『大唐陰陽書』などの中国暦のマニュアル、軍暦のマニュアルが存在することに気づいていたが(「延慶改元・改暦への鎌倉幕府の関与について - 『大唐陰陽書』 付載文書の検討をてがかりにして - 」『国立歴史民俗博物館研究報告』212、2018年)十分に利用されているとはいいがたい状況にあった。そこで、兵法者の関わった記録類で地方暦の記載が明白な肥後相良氏の『八代日記』の記載された内容を、地方暦の内容を反映する密教の師資相承の証文である印信の宿曜の記載と比べることで地方暦の態様が兵法書の世界とつながる可能性があるのではないかと考えた。

また、福島は以前に起請文に記される神の記載を検討し「当国鎮守」「当所鎮守」が戦国期に出現し、それが地域信仰圏を表すことを確認していた(福島金治「戦国島津氏の起請文」『九州史学』88・89・90、1987年)。こうした文言は、各地の起請文の神文にあらわれていた。この問題は地域信仰圏を解明する素材であり、各地でこうした研究が行われた。ただし、神文が書かれた料紙の牛王宝印の発行元である寺社との関係は深く検討されているとはいえなかった。そこで、肥前龍造寺家文書などの起請文を、牛王宝印の使用範囲と関係づけて検討する必要があると考えた。また、神文にはある時期から「軍神摩利支尊天」などの文言が入るようになる。「軍神」の文言が入る起請文は、ある一定の地域的まとまりがあるように考えられたため、新たな文書様式の受容には特定の流儀を備えた兵法者が存在している可能性が高いと考えた。これも未検討の課題と考えられた。

以上の諸点が、本科研を申請する段階での兵法書に関する問題意識であった。

## 2. 研究の目的

右の研究状況を踏まえて兵法書を検討すれば、当時の人々のつながる社会の様相の一端を明らかにできるはずである。その際、勝俣鎮夫氏が指摘された「国家」との関係が重要と思った。「国家」は、戦国大名の支配は大名の支配領域をさす「国」、その家中をさす「家」を合体してできた概念である。暦の問題はその通用する社会的領域を示す。地方暦は、その通用範囲が宗教者・兵法者の活動範囲と一体なのか、つまり大名の「国家」領域と重なるのだろうか、または重層化しているのだろうか。こうした問題は時間管理の問題とかかわる重要な問題なはずである。

暦と兵法書の問題は、島津家文書の兵法書に軍暦のマニュアルがあることから、両者は密接な関係にある。甲斐武田氏の『高白斎記』は兵法者の占いやまじないを記述し、日の干支・宿曜が暦の要件であることをみれば、兵法書が地方暦と関わること明白である。そこで、密教の師資相承の証文である印信類に記載された干支・宿曜を確認していけば、幾分かはわかると考えた。こ

のことは、以前に関東を事例に鎌倉後期のころから京都と異なる暦が使用されはじめ、関東各地で異なる暦の小さな使用圏が認められることを実証していた(福島金治「印信よりみた中世東国の暦」『日本歴史』537、1993年、『金沢北条氏と称名寺』収録)。この方法を類似する資料が伝来する南九州で検討すれば、地方暦の具体相を明確にできるはずである。しかも、島津・相良領では新義真言が広く影響力をもち、この地域の修験者は領主をこえて親しい交流を持っていたことが確認できており、島津家文書の兵法書に含まれる暦のマニュアルを、右の地方暦と連関させて検討すれば、地方暦の作成が兵法者と密接な関係にあることを解明できるだろうと考えた。

次の問題は、近世前期に成立していた兵法書と中世に存在した兵法書との落差である。これまで紹介されてきた兵法書は、大名家や武士の家などに伝来したもので近世に完成していたものが中心だった。そうしたなか、現在は各地で寺院の調査が行われ聖教類に兵法書などが含まれることが知られるようになった。密教聖教は、加持祈祷の実践的方法を示す事相書と、仏教の理念的側面を示す教相書からなっており、中世の兵法書もこれに類似している。1) 合戦での護身などのまじないからなる『張良一卷書』、雲気、出陣の日の吉凶、陣形などをまとめた『訓閲集』は事相書に類似する。それは、合戦での方角の吉凶、戦死しないと願う呪文などが記され、『訓閲集』は切紙・口伝をまとめた書物といえる。一方、2) 先述の『伝説弓法陀羅尼經』は、分国主の役割などを密教に基づいて説明しており教相書にあたる。そして、3) その外部には儒者らによる『三略』『六韜』といった漢籍の兵学書の注釈などがあり、これらも密教系の兵法書に影響を与えていた。右の区分は私見である。こうした兵法書の組成、書物ごとの性格と機能は、重要な検討課題で、それには兵法書の新たな発掘と紹介が欠かせないと考えている。

また、人が神仏へ誓願することで契約を結んだことを証明する起請文は、肥前・筑後方面のものに「軍神摩利支尊天」と記したものが散在しつつまとまった地域で現れる。『大正新修大蔵經』で「摩利支尊天」を検索すると『諸回向清規』に現れ、摩利支尊天像が建仁寺にあるなど、禅僧が関わっている可能性がある。そして、それが起請文に「軍神」と記される地域的まとまりがあるからには、その背後にその様式を記したマニュアルが存在した可能性が高い。そのことを明らかにするため、神文が記された牛王宝印の発行元と神文の文言の関係を調査することとした。

以上が、今回の科研を申請した際の主要な目的であり、なかでも密教の影響下にある兵法書の発掘と紹介を第一の目的とした。そして、内容から当時の人々の「国家」観を解明することをめざし、起請文の神文、また地方暦と兵法書の関係を明らかにすることを作業上の目的とした。

### 3. 研究の方法

#### (1) 教相書の性格をもつ兵法書の発掘

兵法書の発掘は、本科研以前に人吉願成寺文書に『伝説弓法陀羅尼經』を確認していた。今回、島津家文書中に『刑罰治国慮理撫民武用記』、防衛大学校総合情報図書館所蔵「有馬文庫」に『黄石公三略私抄』を確認し、これを愛知学院大学の紀要に本文を一括して紹介した。右のうち、『刑罰治国慮理撫民武用記』は当主となるものの育成と当主のありかた、また家臣や住人の身分について、一方、『黄石公三略私抄』は漢籍の兵学書『三略』について密教を基盤に解釈したものだ。後者の注釈に使用した『三略』は、清原家の使った本とは異なるもので本文の意図的な改変も行われていた。漢籍研究からみるとテキスト面でルーズな理解、兵学からみれば独自の慈悲に基盤をおく見方など興味深い解釈が記されている。

〔その他〕

この間、有馬文庫では、他に「兵法四十二眼目五ヶ大事」「大元次第」を撮影・調査した。また、龍造寺家文書でも兵法書を確認した。ただし、その内容検討は未着手となった。また、米沢市図書館・岩手県立図書館・秋田県立図書館で上杉・佐竹氏等の兵法書について調査したが、甲州流が多かった。また、大分県可児家文書にも兵法関連の暦関係資料を確認し収集した。

#### (2) 起請文の牛王宝印

龍造寺・後藤・多久家などに伝来する起請文は、戦国大名龍造寺氏の大名領国形成を国人らとの関係で論ずる主要な素材とされてきた。その対象は、起請文の本文の契約内容が中心だった。また、起請文の神文の料紙に使われた牛王宝印の発行先が確認され、地域信仰圏の様相が明らかになっていた。ただし、起請文の神文の「軍神摩利支尊天」といった表記、神文にみえる寺社の序列と牛王宝印の発行元との関係は明瞭ではなかった。そこで、佐賀県立図書館の龍造寺家文書の起請文を実見して調査し、佐賀平野を中心にした領主が龍造寺氏に誓約したものは九州に広く分布する英彦山の牛王宝印で一宮千栗社、佐賀平野の信仰の中心となる河上社を基礎にし、後藤家文書は黒髪山の牛王宝印がめだち神文にもこれが記載されるように、信仰圏を異にしていた。このことを基礎に肥前の牛王宝印発行も元と起請文の発給者との関連を検討した。

#### (3) 人吉願成寺文書中の聖教類にみえる暦の確認

願成寺文書の師資相承関係聖教にみえる伝授証文の切紙や印信類に記載された日付の干支・宿曜等を確認し、これを京都の暦と比較してそのズレや違いを確認した。さらに日向都城島津氏の『三代日帳』、人吉相良氏の『八代日記』など日記に近い記録に記された干支・宿曜を確認した。これらの記載は地方暦の内容を反映した資料と考えることができ、地方暦の復元の素材として利用した。さらに島津家文書の兵法書に含まれる軍暦等の利用のありかたを検討した。

### 4. 研究成果

#### (1) 研究論文

福島金治「戦国期島津氏の兵法書『刑罰治国慮理撫民武用記』 - 翻刻と紹介 - 」(『愛知学院大学人間文化研究所紀要 人間文化』34、2019年9月)

福島金治「中近世移行期の兵法書にみる「国家」観 - 防衛大学校所蔵『黄石公三略私抄』の翻刻と紹介 - 」(『愛知学院大学人間文化研究所紀要 人間文化』37、2022年9月刊行予定)

「戦国期肥前の起請文の神文よりみた在地社会」(市村高男編『中世石造物の成立と展開』高志書院、2020年4月)

「中世後期における地方暦と在地社会」(『新陰陽道叢書』第二巻、名著出版、2021年1月)

は、密教の教相的内容をもつ書物( )、密教僧による漢籍解釈が「国家」の理解に展開した書物( )の紹介である。

の『刑罰治国慮理撫民武用記』は1485年に薩摩冠嶽山の住持勤久の著作である。冠嶽山は島津氏の信仰の篤い場として知られ、同書は密教を基礎に当主となる人物の養育・育成の仕方、また武士を官吏として位置づける考え方が明瞭で、撫民思想に立脚した国家統治を示す内容が記されている。そして、同書は島津義弘の近臣川上久国の所持本も存在することから、島津氏の当主・家臣に共有される知識だった。後に現れる江戸幕府のような政治体制は、右にみるような考え方が基本にあり、分国主やその家中に共有される思想となっていくことが確認できた。

の『黄石公三略私抄』は、1614年の密教僧堯胤の著書である。堯胤の出自や伝歴・事績等は現状のところ不明である。兵法書の収集や刊本の編集に携わった有馬成甫氏の収集本で、現在防衛大学校の所蔵となっている。堯胤は豊臣秀吉の全盛期に成長した人物で、「関白」を「覇者」と位置づけるなど豊臣政権を相対化していた。その結論は戦乱のない「安全ノ国」の達成にあり、武士を吏僚と位置づけることを主張している。この考え方は『刑罰治国慮理撫民武用記』でも説かれており、仏教の慈悲を基本にした撫民を基礎に、江戸幕府成立にむかう理念的なすがたを表出した書物といえる。その意味で新たな「国家」観を示した書物といえる。

は起請文の神文と牛王宝印との関係を分析し、 は地方暦の様相を兵法書の軍暦とあわせて分析したもので、その実証方法と目的は既述したので、詳細は省略する。

## (2) 資料収集

防衛大学校有馬文庫、米沢市図書館(上杉家文書関係)・岩手県立図書館・秋田県立図書館(佐竹文書関係など)・大分県先哲資料館(可児家文書)などで調査を行い、関連資料の撮影や複製資料の収集を行った。ただし、コロナの渦中にあったため、現地調査や原本調査に十分な時間をあてることができなかった点は残念であった。

なお、米沢市図書館などでは兵法書と類似した構成とも思える内容の医療技術書(医術・馬医など)を確認できた。これらは、今後の兵法書の周縁部を理解する上で貴重な素材と考える。

## (3) 反響と課題

今回の科研に対しては、アメリカ人研究者など海外からも問い合わせがあった。兵法書と仏教・儒学との関係などに海外研究者が注目しているのだろう。科研の申請書、論文のリポトリューでの閲覧があつてのことと感じた。今後、研究をつづけるにあたり、貴重な経験となった。

また、今回までの調査でその存在を確認しながら、時間が長期におよぶ可能性のある教相的要素の濃い資料、事相的要素の切紙や地方暦に関わる資料の存在に出会った。後者については、いまだ島津家文書の兵法書のなかの切紙類の位置づけなどを完了できておらず、見通しが立たないために今後の作業として残した。これらの検討を今後の課題としたいと思う。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 福島金治	4. 巻 48
2. 論文標題 中世後期南九州の兵法書の性格とその受容形態	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『愛知学院大学文学部紀要』	6. 最初と最後の頁 27 - 42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 福島金治	4. 巻 1
2. 論文標題 戦国期肥前の起請文の神文よりみた在地社会	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 市村高男編『中世石造物の成立と展開』（高志書院）	6. 最初と最後の頁 411-433
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 福島金治	4. 巻 2
2. 論文標題 中世後期における地方暦と在地社会	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『新陰陽道叢書』第二巻、名著出版、	6. 最初と最後の頁 277-304
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 福島金治	4. 巻 37
2. 論文標題 中近世移行期の兵法書にみる「国家」観 - 防衛大学所蔵『黄石公三略私抄』の翻刻と紹介 -	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『愛知学院大学人間文化研究所紀要 人間文化』37	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------